

論文の概要および審査結果の要旨

氏 名（本 籍）	植田 愛美（奈良県）
学 位 の 種 類	博士（教育学）
学 位 記 番 号	甲第18号
学位授与の日付	令和2年3月18日
学位授与の要件	佛教大学学位規程第5条第2項
学 位 論 文 題 目	黒一色彩樹木画テストにおける心理臨床学的意義と その適用に関する研究
論 文 審 査 委 員	主査 松瀬 喜治（佛教大学教授） 副査 牧 剛史（佛教大学准教授） 副査 高橋 依子（大阪樟蔭女子大学教授）

〔1〕 論文の概要

黒一色彩樹木画テストとは、鉛筆で木を描いた後に、新たに色彩描具のみで木を描くといった樹木画テストの変法であり、名島（1996）によると、Fodor&Kendel によって schwarzen und farbigen Baumzeichnungen（黒と色彩によって描かれた樹木画）として1966年に考案され、日本では名島らが1974年に導入した描画技法のことである。この黒一色彩樹木画テストは色彩を導入することで描き手についての情緒面が把握できる可能性が示唆されているが、他の描画法と比べ歴史も浅く、発達の基礎研究や臨床的有效性に関する先行研究も極めて乏しいのが現状である。そこで本論文では、まず黒一色彩樹木画テストの背景となる樹木画テストについて概観の整理を行い、樹木画テストの色彩導入の意義や、心理臨床の場面でこの描画法を活用する意義について明らかにすることが目的である。

第1章では、まず、樹木画テストを用いて行われた一連の研究をまとめ、様々な立場によって樹木画テストが心理臨床の場で取り上げられてきた歴史を論じている。その中で、樹木画テストの変法である2枚実施法についても触れ、同じ2枚法である黒一色彩樹木画テストについても説明を行った。その中で色彩樹木画を導入する意味について述べ、臨床場面でアセスメントツールの一つとして利用できる可能性に言及している。

第2章では、まず研究1において、2事例の統合失調症者における黒一色彩樹木画テストの描画例を提示し、病者の描画にどのような特徴が見られたのかを検討している。その結果、事例Aでは、丁寧に彩色をする様子や黒樹木画と色彩樹木画においてバランスを重視して描く様子が見られ、その様子からは描き手が抱える内的な世界の変わりにくさが窺えた。ただし色を何度も塗り込む行為には、描き手の内部を埋めるような作用があり、さらに樹木画の対称性からは、描き手の心理的な安定への渴望も示されていると考察された。一方、事例Bでは、2枚の描画内容の変化が一連の描画表現を眺めることで明らかとなり、特に、黒樹木画では、樹木の全体像が描かれたにも関わらず、色彩樹木画では幹のみが表現された点が特徴的であった。このような極端な変化には、色彩そのものが影響したことや、再び同じものを描きたくないという描き手のこだわりを刺激し、事例Bの自閉性が高まった可能性も推察された。これらの描画例からは、描き手の顕著な描画特徴が示されており、黒一色彩樹木画テストを実施することで描き手の理解に関する貴重な手がかりが得られると考察された。

また、研究2では、黒一色彩樹木画テストにおける色の数、空間使用量、樹木画の計測（樹冠の高さ、幹の高さ、幹の幅）を用いて統計的なデータをもとに実証的な検討を行っている。そこではSchizoid群（統合失調症者群）（以下S群と略）14名と、Control群（以下C群と略）として女子大学生15名の描画を比較すること、さらに黒樹木画と色彩樹木画を比べ、描画にどのような違いがあるのかを検討している。なおS群は、慢性期の患者5名、急性期を繰り返す患者が1名、残りすべては急性期を脱している患者であった。その結果、色の使用数についてS群はC群よりも色の使用が有意に少ないことが明らかになり、次に黒樹木画における群（S群・C群）と領域の比較、色彩樹木画における群（S群・C群）と領域の比較どちらにもS群はC群に比べて空間使用量が少ない傾向があるため、空間使用量の乏しさが、統合失調症者の内的生産性の低下と関連している可能性があることが示された。また、黒樹木画と色彩樹木画において、S群では用紙中央、用紙左上の領域が比較的多く使用されているが、C群では用紙右上、用紙中央の領域が比較的多く使用される傾向が示された。これらの結果からは、用紙左上の領域を多く使用するS群は、描画時に自閉的になりやすく内的生産性の低下が示唆された。一方、用紙右上を多く使用するC群は、自閉的にはならず描画に対して意欲的に取り組みやすく、描画を仕上げるという目標に向かって能動的に取り組める可能性が認められた。また、用紙中央はどちらの群も多く使用した領域であるが、用紙中央に描く行為には描画する上での戸惑いや期待といった何らかの感情が生じていることが示唆された。次に、黒一色彩樹木画（S群・C群）における樹冠の大きさに関しては、黒樹木画と色彩樹木画どちらにもS群はC群よりも小さい傾向が見られた。このようにC群との違いが見られた理由として、S群の病態水準の重篤さから現実への視野が狭まり、興味の範囲も限定されることで、外界への意識の向け方とも関わりが深い樹冠への描きにくさに繋がった可能性が考察された。

第3章では、描き手の主観的体験に着目し、黒一色彩樹木画テストを描く際に、描き手はどのような体験プロセスを辿るのかという点について、14名の描き手の語りを元に修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチを用いてモデル化を試みている。その結果、「黒一色彩樹木画における中心描画体験」といった描き手に生じる中心的な体験の他に、「描画プロセスにおいて色が担う役割」、「描画プロセスによる感情体験」といった色彩が担う意味や描画することで喚起される感情体験についてなど、大きく三つの視点が抽出された。そこで、黒一色彩樹木画テストの2枚に共通する「黒一色彩樹木画における中心描画体験」が「描画プロセスによる感情体験」や「描画プロセスにおいて色が担う役割」とも関わり、それらが描画での中心体験と相互的に関わることで感情や体験の変化を促すきっかけとなり、描き手の表現や描画プロセスに影響を与えていくことを明らかとなった。さらに黒一色彩樹木画テストにおいて、黒樹木画から色彩樹木画への移行は重要なプロセスであることを示しており、この連続した2枚の描画によって、描き手は描画行為それぞれの体験をより明確にし、描き手自身に変化を促すことが考察された。

第4章では、黒一色彩樹木画テストの理解を深めることを目的に、描画療法・描画テスト熟練者（以下 Th と略）の視点を取り挙げて検討を行っている。6名の Th の語りを元に、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチを用いてモデル化した結果、「描画を読み取るための探索過程」といった描画への違和感や各アイテムに注目するといった体験や「黒一色彩樹木画テストにおける共通理解の観点」といった2枚の描画の類似点に着目するという二つの体験プロセスが生じることを見出している。まず Th は、直感的に描画を眺める姿勢で樹木画と対峙しており、そうすることによって Th が描画に抱くイメージを抽象的なものから具体的な解釈へと落とし込む作業が行われていくことが明らかとなった。さらに黒一色彩樹木画テストを眺めることには、黒樹木画だけでは見えなかった描き手の内面を確認するだけでなく、色彩樹木画を導入したことで得られる肯定的な理解の側面について Th が読み取ることも含まれ、これらの体験が互いに影響を与え、Th は探索的に黒一色彩樹木画テストを捉えていくことが示された。次に黒一色彩樹木画テストを眺める過程において、Th は黒樹木画・色彩樹木画に共通している点へと目を向ける。この共通性に目を向けるからこそ2枚の描画の差異が際立ち、それぞれが持つ効果に Th が着目し「2枚法だからこそできる解釈」にも繋がっていく。特に色彩樹木画においては、色の持つ刺激の影響に Th は注目しており、そして、色彩からの揺さぶりに対して描き手自身がどう対処するのかということも、描き手の心理的状況やストレス耐性をアセスメントするために有効な着目点であることが示唆された。なお、第4章では、描画を別々に見た場合、変化のあるなしという2極化された物差しでのみで黒一色彩樹木画テストを捉えてしまう危険性についても言及している。

第5章では、心理臨床の場において黒一色彩樹木画テストといった2枚法を導入することによって、描き手であるクライアント（以下 C1 と略）にはどのような描画表現が生じ、査定者（以下 As と略）はその表現をどのように理解し、解釈するのかという点について検

討を行っている。また、第5章では、第2章で論じた統合失調症者や健常成人を対象とした研究を踏まえて、黒一色彩樹木画テストで、これまで取り上げられていない自閉スペクトラム症（ASD）や注意欠如・多動症（ADHD）などの診断を受けている児童の臨床事例も対象に考察をしている。これらの臨床事例の描画を検討した結果、黒一色彩樹木画テストを解釈する上では、黒樹木画と色彩樹木画といった2枚の描画過程において、C1が刺激に対してどのように対処し表現を行ったのかを詳述し、さらにC1が2枚の描画をどのように説明していくのかといった語りの要素も取り入れていくことが重要であることを論じている。また、精神科領域の事例において、1枚目の黒樹木画では、C1に無彩色ショックが生じる可能性を考慮し、その後、色彩樹木画ではどのような表現をC1が行うのかをAsが見守る必要性のあることを強調している。そして児童の黒一色彩樹木画テストを眺める上では、まず描き手の年齢による発達段階を考慮する必要がある、Asは年齢によって出現する描画特徴について留意しておくことが重要であり、前述の年齢の要因や描画時の様子や描画時の体験過程など、様々な情報を含めて児童の描画を俯瞰的に眺めていく必要性が考えられている。

次に、彩色過程では、色の使用方法にも注目する必要性があり、どのように色が使用されているのか、自然色の使用は認められるのかといった点などを確認することも求められる。さらに、明るい色を中心に使用しているのか、寒色を中心に利用しているのか、そして、色の使用数に注目する必要性にも言及している。あまりに色の使用数が多い場合や乱雑に彩色されている場合などは、C1の衝動性や躁的な状態を示唆する場合があることを考慮し、C1の心理状態のアセスメントの一助として利用していくことの可能性について論じている。なお、色彩を導入することで、C1の情報がより多く得られるといったメリットがある一方で、C1に負担や負荷を与える可能性があることもAsは留意しておく必要がある。

第6章では、まず本論文で用いた黒一色彩樹木画テストの実施法について改めて記載し、実施者としての留意点や描具を持つ意味について考察を行っている。また、これらを踏まえた上で、黒一色彩樹木画テストを臨床場面で活用する意義について考察している。

黒一色彩樹木画テストを臨床場面で活用する意義について、まず2枚施行法による描画過程を通すことで、Asが描画の変化や体験を追える機会に繋がる可能性を述べて、次に、描き手自身が表現のしやすさを実感し、描画体験のやり直しに繋がる可能性が期待できるという利点も指摘している。

第7章では、今後の課題として、本研究の限界や問題点を挙げている。本論文では調査協力者数が少なく性差や年齢に偏りが生じているため、健常群や臨床群のデータを蓄積し、統計分析の精度をあげて、黒一色彩樹木画テストの心理検査としての信頼性と妥当性を高めていく必要がある、さらに、心理療法の過程の中で、継続的に黒一色彩樹木画テストを実施することで描画内容の変化や描画を導入したことによる効果を検討していく必要性もある。最後に黒一色彩樹木画テストを臨床場面において利用していくための、より明確な解釈仮説もしくは解釈の視点を明らかにしていく点が今後の課題として提起された。

〔2〕 審査結果の要旨

一つの心理検査が成長・発展していく過程においては、その検査の信頼性や妥当性についてはもちろんのこととして、多くの基礎的・臨床的な研究が積み重ねられなくてはならないのは言うまでもない。植田愛美氏の「黒一色彩樹木画テストにおける心理臨床学的意義とその適用に関する研究」では、基礎的な研究や臨床的な研究が十分になされてこなかった黒一色彩樹木画テストに光を当て、その心理臨床的な意義を明らかにしようとした点において、新しい研究分野を開拓するという挑戦的な研究であることが、まずは評価できる。本論文は、「これまでの樹木画テストに関する研究とその変法について」の研究史にはじまり、全体として7章で構成されている。

その第一は、樹木画の描き手の主観的体験の語りと読み手であるセラピスト（描画テスト・描画療法の熟練者）の語りを元に、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチを用いてモデル化した質的な基礎的研究と統合失調症者群と対照者群との描画特徴の量的比較を試みた基礎的研究、そして、第二は心理臨床の実践の実際の事例（A～Hの8事例）を素材とした個性記述的な研究であり、心理臨床的な研究としては基本的な方向を充足した形をとっている。しかも、第二の研究が単に個性記述的な事例研究にとどまっておらず、第一の研究を行う発端と基礎を成しているところが独特な点であり、常に実践と密着することを要求される心理臨床学的な研究の特殊性・独自性を如実に示している。

第1章では、黒一色彩樹木画テストが、他の描画法と比べ歴史も浅く、発達の基礎研究や臨床的有効性に関する先行研究も極めて乏しいことを踏まえて、まずはこのテストの背景となる樹木画テスト（バウムテスト）について概観の整理を行っている。Koch(1957)によって考案された樹木画テスト（バウムテスト）は、心理臨床の現場では広く使用されている代表的な技法の一つであり、その臨床的な有用性や妥当性に関する研究も多くなされている。描かれた木という表現を中心として眺めるとき次のような三つの分析の視点が示される。第一に、樹木画の全体的な印象の評価が重視される。第二に、描き手が何を描いたのかという描画の内容ではなく、どのように描くかという描画のしかたやスタイルを検討する形式分析が行われる（描画表現の分化と子どもの発達には密接に関連しているという観点より発達の指標の研究やある特定の疾病や病的な状態との関連を検討する病理指標の研究などが存在する）。第三の内容分析は、「絵の何を描き、何を描かなかったか」という視点から分析する過程である。描画の中で強調されたり無視されている部分を取りあげたり、描画像の特殊な部分の存在の有無を検討していくのである（代表的な研究では、統合失調者が描くことが多いとされる「メビウスの木」に関する研究や、垂れ下がった柳の木を描く者は、「抑うつ状態、内向性、引きこもり状態」などを表し、自己主張が少ないことや外界を無視して自分の世界に生きようとする傾向を有する者に描かれやすいなどの研究報告が挙げられる）。本章では、このような樹木画テストの基本的な研究動向（全体的な印象の評価、形式分析、内容分析）を基礎にして、これまでの樹木画テストの国内外の多くの論考を研究史として体系的に吟味・整理している点が高く評価できる。

<本論文の心理臨床的な意義とその評価について>

1、黒一色彩樹木画テストの教示の意義

本論文における黒一色彩樹木画テストの教示は、名島（1996）の行った研究（黒一色彩バウムテスト）における教示に一部変更を加えている。それは名島の研究では「実のなる木を一本描いて下さい。ただし、ヤシとバナナは避けて下さい」とあるものを本論文では、「木を一本描いて下さい」という教示に変更を施している。これは「実のなる」「ヤシとバナナは避けて下さい」という教示内容では、特定の描画指標を誘導する可能性が先行研究において指摘されており、変更を加えて実施したことは適切で妥当な判断であると評価できる。

2、黒一色彩樹木画における、「描き手」と「読み手」の主観的体験に焦点を当てた意義

第3章では、黒一色彩樹木画の「描き手の主観的体験」に着目した質的研究を行っている。樹木画を検討する際、「描かれた絵」に注目し解釈や分析を行なう研究が大多数だが、本章の研究では、樹木画を描く際の描き手の内的で主観的な体験過程を細やかにたどり、モデル化を試みていることが独創的である。結果のモデル図からは、描き手が描画する際に躊躇いながら試行錯誤をしていること、また、2枚目として色彩樹木画を描く際に生じる主観的体験が整理されている。心理臨床の場で黒一色彩樹木画を用いる際、描き手の体験をどのように理解すればよいのかを知るための手掛かりを与えていると評価できる。しかし、本章の研究の協力者は健常群のみであり、臨床群の主観的体験は挙げられていない。黒一色彩樹木画を描く際の臨床群の主観的体験を健常群と同列に捉えてよいかは疑問であり、今後の更なる研究が待たれる。

第4章では、描画テスト・描画療法熟練者（読み手）の「樹木画を理解する視点」について質的研究を行っている。黒一色彩樹木画という2枚法は心理臨床の現場で広く使われている訳ではないため、解釈技法も確立していない。熟練の心理臨床家がどのようにこの2枚法を読み解くのかをモデル化することで、この心理検査を用いたアセスメントの可能性を探ろうとしている。研究結果からは、2枚目の色彩樹木画にどのように対処するかによって描き手の心理的状況やストレス耐性をアセスメントすることが可能となり、「2枚法だからできる解釈」があることが示されている。心理検査としての2枚法の意義という点でも貴重な知見を与えている。しかし、研究協力者の経験年数に偏りがあること、使用した描画が統合失調症患者のものだけであることなどが本研究の課題である。他の精神疾患患者の黒一色彩樹木画を含め、解釈する視点をより幅広く検討する研究も今後必要となるであろう。なお、第3章および第4章で行っている質的研究と第2章の研究2の量的研究は、臨床事例における黒一色彩樹木画を検討する際の枠組みや基準となり、本論文の第二の研究である個性記述的な事例研究の考察の軸となるものであり、心理臨床的な事例のアセスメントを行う際に貴重な知見を提供するものと高く評価できる。

3、色彩樹木画テストという「色彩」を導入したことの心理臨床的な意義

色彩を導入することに関しては、ポジティブな側面とネガティブな側面の両方から吟味する必要がある。本論文においては描き手の体験として、「期待される色彩効果」と「負荷となる色彩効果」という概念によって明らかにされている。

色彩の導入は描き手に少なからず負荷を与える側面を持ちながらも、同時に新しい体験への期待や好奇心を喚起する作用があり、また、描き手が抱える不安や戸惑いを緩和させる機能も有していると考えられる。黒一色彩樹木画テストは、描き手に試行錯誤する体験をより多く与える機会にもなり、描き手のそうした体験が、色彩を用いた樹木画では自分のイメージをより自分らしく表現しようとするモチベーションにも影響すると考えられる。また、表現する際に手応えを感じる事が色彩樹木画での満足感を描き手にもたらすのである。なお、黒樹木画に加えて、新しく色彩樹木画を描くことは、従来の黒樹木画だけでは現れにくかった描き手の新たな一側面を浮かび上がらせると考えられる。このような描き手の姿が現れることが、色彩樹木画実施における心理臨床的な意義の一つであると考えられる。色彩を導入することによって、査定者にとっても、今まで目を向けられていなかった描き手の新たな一面を得る機会にも繋がる場合があるものの、描き手のパーソナリティや病理を表面化することにもなる。その典型的な例としては、第2章で示された統合失調症者の描画が挙げられる。事例Bでは、黒樹木画では木の全体像を描いていたものが、色彩樹木画に移ると「うるこ模様の幹」のみが描かれた。この描画の変化については、統合失調症者特有の空間認知の歪みと対人関係における距離のとれなさを表現している可能性がある。しかし、同じ統合失調症者の事例Aにおいては、殆ど形態が同じ2枚の黒樹木画と色彩樹木画ではあるが、バランスを重視して丁寧に色を塗り込む行為からは、描き手が抱える内的な世界の変わりにくさと同時に、描き手の心理的な安定への渴望も示されている。色彩と感情・情動の関連性という観点からは、同じ投映法検査であるロールシャッハ・テストにおける色彩反応と情緒的な統制の指標とする仮説が有力なものであり、本論文においてはカラーショックという負荷の影響についてその関連性を論じている。1枚目の黒樹木画では、C1に無彩色ショックが生じる可能性を考慮し、その後、色彩樹木画ではどのような表現をC1が行うのかをAsが見守る必要性のあることを強調している。一方で、2枚目の色彩樹木画においては、C1に色彩ショックが生じる可能性もあり、色鉛筆という刺激をC1が色彩樹木画の中でどのように治めて表現していくのかについて見極めていく姿勢が、アセスメントする立場のAsには求められる。

このように色彩を導入することで、C1の情報がより多く得られるといったメリットがある一方で、C1に負担や負荷を与える可能性があること、そして、このような負荷による影響が生じた際、C1の刺激への反応や対処方略をアセスメントすることが、黒一色彩樹木画テストを実施する意義の一つであり、これらの負荷の影響に十分留意することで、Asは黒一色彩樹木画テストといった2枚連続した描画法を心理臨床の場に活かすという今後の研究の方向性を明らかにしている点が本論文を高く評価する所以である。

4、今後の課題

本論文では調査協力者数が少なく性差や年齢に偏りが生じているため、健常群や臨床群のデータを蓄積し、統計分析の精度をあげて、黒一色彩樹木画テストの心理検査としての信頼性と妥当性を高めていく必要があり、さらに、心理療法の過程の中で、継続的に黒一色彩樹木画テストを実施することで描画内容の変化や描画を導入したことによる効果を検討していく必要性もある。最後に、黒一色彩樹木画テストを臨床場面において利用していくための、より明確な解釈仮説もしくは解釈の視点を明らかにしていくこと、そして、黒一色彩樹木画テストを施行すること自体がもたらす心理療法的側面を探究することが今後の課題として提起された。

以上、慎重に審査した結果、本論文は博士（教育学）の学位を授与するに相応しいと判断する。